

トマス・アクイナスとデカルトの真理論

—存在論的真理をめぐって—

有賀 雄大

本稿の目的は、トマスの真理論との対比を通してデカルト哲学の一側面を明らかにすることである。

デカルト哲学がいくつかの面においてアリストテレス＝スコラ哲学に対する異議申し立てであったことに異論はないように思われる。そしてデカルトが対峙したこの伝統においてトマスは重要な位置を占めていた。そこで当然、トマスとデカルトとの関係と差異については様々な側面から膨大な量の研究が行われてきた。

しかし真理論、すなわち、真理が何であるか、という主題に関して、デカルトとトマスを対照する研究は充分に行われていない。例えば、中世哲学研究の大家でありながら、中世との関係という観点からデカルトについて比類なき業績を残したジルソンも、真理論という視点から両者を取り上げはしなかった。なるほど彼は「第四省察」における「過誤 (error)」の問題についてトマスからの強い影響を指摘しているが、彼はむしろそれをトマスにおける「罪 (peccatio)」の問題と同一であると見立て¹、「罪」に関するトマスの議論との突き合わせを行う²。こうしたジルソンの研究は真理論とは別の主題に関するものであると言える³。

こうした状況にあって、アムラン⁴によるある説が検討されずに残されている。アムランは、デカルトがある書簡において真理の概念が「超越的に明晰 (transcendantelement claire)」だ (II, 597, l. 1f.) と記していることについて、次のように述べている。

彼 [デカルト] は、超越的述語 (prédicats transcendants) の教説を参照している。この超越的述語は、トマスのいうように「いかなる存在者にも付随する (circumeunt omne ens)」。真理は、区別すべき二つの意味 (我々がすぐ後で見ることになる) のうちの一つにおいては、何であれ全ての存在者について肯定される：「全ての存在者は一であり、真であり、善である」⁵。

こうした真理をアムランは「存在することにおける真理 (veritas in essendo)」と

呼ぶ。

彼がここでデカルトに帰属させている真理概念は、研究者たちによって「存在論的真理」と呼ばれるものである。この語は、存在する者であるならいずれも真である、と言える意味での真理、言い換えれば、「例外なく全ての存在者に述語づけられる」真理を指して通常用いられる⁶。このような真理概念は言うまでもなく、「真」を「存在者 (ens)」と可換的な「超越概念 (transcendentalia)」のうちに数え、「存在者と真とは置換される (ens et verum convertuntur)」と考える伝統のうちにある。我々も先行研究に倣って、以下で「存在論的真理」という語を、上記の意味をもつ術語として用いる。

アムランの解釈の根拠は「超越論的に明晰」というデカルトの文言のみであるが、彼の説が全く聞くべきものを含んでいないわけでもない。というのもデカルトは、ある書簡において、「真理は存在において、虚偽は非存在においてのみ成り立ちます」(V, 356, l. 15f.) と記しているからである。ここでデカルトが、真理と存在のもつ極めて密接な関係についての思考を覗かせていることは確かである。真理が専ら存在において、虚偽は非存在において成り立つ、というこのテーゼを我々は以下で VE テーゼ⁷と呼称する。このテーゼは、のちに述べるように（本論第2節）『省察』の議論の中核に関わる重要性を認められてきたが、このテーゼの意義自体が充分に明らかにされているとは言えない。

そこで本稿が問題とするのは、デカルトの VE テーゼによって表されている思想が、トマス流の存在論的真理の概念と同じなのか、異なるのか、異なるならばどのように異なるのか、ということである。以下ではまず、トマスの真理論における存在論的真理の輪郭を明らかにしたあと（第1節）、デカルトの VE テーゼを分析し（第2節）、最後に両者の比較を行う（第3節）。

1. トマスの存在論的真理

中世の真理論には二つの伝統的な傾向があるとされている。その第一は、真理とは、判断すなわち主語と述語の結合が真であることに他ならない、という、アリストテレスに由来する傾向である。対して、真理は実在する事物それ自体に他ならない、という立場がある。こちらは新プラトン主義やアウグスティヌスに帰せられる⁸。

周知のごとくトマスは、真理を<知性と事物の合致 (adaequatio)>と定義する。真理論を扱うトマスの主要なテキストは、『命題集註解』第一巻第十九篇第五問、

『真理論』第一問、および『神学大全』第一部第十六問だが、いずれにおいても合致こそが真理の本来の定義であるという立場は貫かれている。こうした立場に立ちながらトマスは、判断の真理と事物の真理という上述の伝統を引き受け、それぞれがどのような意味で真理と言われうるのかを確定し、体系的な理論へと統合した。本節で我々が問題とするのは、二つの真理をトマスがどのように関係づけ、存在論的真理はそこでどのような規定を与えられるのか、ということである。

1.1 合致としての真理と事物の真理

トマスは、『真理論』「第一項」において「真理は何であるか」という問いを立て、最終的には真理は三通りに定義されると結論づける⁹。

1)「あらゆる認識は認識者の認識される事物への類同化によって成立する」が、この「類同化」の成立それ自体が真理である。トマスにおいて認識は次のように進む。感覚を介して外的事物から受け取った表象像に能動知性が働きかけることで、知性が事物の形相を受容する。こうして知性は、認識対象と同じ形相を持つに至る¹⁰。こうした事態をトマスは「合致」あるいは「同形性 (conformitas)」と呼ぶ。真理の第一の定義はこの合致そのものである。

2) この合致は、真理の「認識 (cognitio)」とは截然と区別される。合致の成立は直ちに真理の認識それ自体ではなく、認識者と認識対象との合致は「認識の原因」である。なぜなら、合致において認識者が認識対象と同じ形相をもつとしても、この段階においては、同じ形相を持つ二つの事物があるというにすぎず、知性が自己と事物とが同じ形相をもつことを認識しているわけではない。ヴァンドヴィルの言うように、合致は「認識の存在論 (l'ontologie du connaître) の平面のもとで」思考されている¹¹。こうした合致としての真理の「結果」として生じる認識¹²はしたがって、真理の第二義をなす。

3) そして真理の第三の定義は、「真理の概念に先立」ってある、「事物の存在性 (entitas rei)」である。合致の関係が成立することをそもそも可能にしている、関係項の一つであるところの事物は、その合致に関わる限りで「真である」と言われる。我々が本稿でとりわけ着目するのはこの真理概念である。

ここで確認しておくべきことは、トマスはあくまで「合致」の事態において「真」の概念は形相的に完成される¹³と考えるということである。つまり、「合致」こそがほんらい真理の本質をなす¹⁴ものであって、それに関わる事物と認識とを真と呼ぶ残り二つの定義(2と3)は、いずれも派生的なものに他ならない。「第二項」においてはより明確に、合致としての真理と事物の真理との関係が語られる。

「事物が真と言われるのは、事物が知性に合致せられることから他ならない。したがって真はより後に事物のうちに、より先に知性のうちに見出される」¹⁵。事物についてと言われる真と、合致としての真は、「より先」「より後」という関係に立つ。この関係はトマスの例解によれば次のようなものである。「健康」は「より先に」動物について言われ、「より後に」薬について言われる。この場合、因果においては薬が先立っているが、健康の「充全な概念が初めに成り立つところのもの」を先とするという、概念上の順序からすれば、動物こそが「より先に」健康を述語づけられる。これと同じ意味で、事物は、たとえそれが知性を動かし、合致の原因となりうるとしても¹⁶、概念の上では、合致の関係に立ちうるということを通して、派生的に真と述語づけられうるのであるから、「より後」なる仕方
で真と言われるのである。

1.2 存在論的真理

我々が重視すべきはこの、派生的な、事物の真理である。これは、我々が本論冒頭部で規定した意味で「存在論的真理」と呼ぶことのできるものだろうか。

『真理論』「第一項」主文冒頭においてトマスは「超越概念」の枠組みに則って、「存在者 (ens)」と「真 (verum)」との関係を明らかにしている¹⁷。それによれば、諸超越概念は「存在者」という名では明示されていないが「存在者」概念に含まれる「様態」を明示化するものと位置付けられる (I. 111-114)。その一つである「真」は、あらゆる存在者に通じる一般様態 (modus generalis) であり、かつ存在者と他との関係において成立する様態である。存在者と他との関係には「分離」の関係と「適合」の関係とがあり、適合の関係、とりわけ「存在者の知性への適合をこの真という名称は表現する」¹⁸。以上から、真すなわち知性との合致は、あらゆる存在者が存在者である限りにおいても様態であると言える。

ここで混乱を避けるために、知性との「合致」に関わる二つの概念すなわち「事物 (res)」と「存在者 (ens)」の意味を明確にしておこう。トマスによれば res もまた ens の一般様態であり、ens とは次の仕方
で明確に区別される。「ens は存在することの現実態に由来して得られる [語である] が、「事物」という名は ens の何性ないし本質を表す」¹⁹。現在の研究における標準的理解は、存在の現実態と何性とがともに合致を成立させる要素だというものである²⁰。第一に、先述したとおり合致は、知性と事物とが同じ形相をもつことにおいて成り立つのだから、それは何性なくしては成立しないと考えられる。他方でトマスは『命題集註解』「第一項 真理は事物の本質であるか」において、事物を構成する「何性 (quidditas)」

と「存在 (esse)」のうち、後者こそが合致の基盤であり、「事物の存在それ自体が、知性による認識のうちにあるに即して、真理の原因である」と記す²¹。これはどういうことだろうか。ここでトマスは「存在」という語を存在の現実態という意味で用いていると考えられている。それゆえこの一節は、事物の何性は、現実態にある限りで、合致を成立させようということを述べているに過ぎず、これは、何性・本質の寄与を否定するものではない。

こうして、あらゆる存在者はその有する何性という面からみれば「事物」として合致をなし、存在の現実態という点では esse によって合致する。あらゆる存在者は、この両側面を備えることで、全て「真である」と言える。これがトマスにおける存在論的真理に他ならない。

1.2.1 神的知性と人間知性

しかし合致としての真理があらゆる存在者について成り立つというトマスの説は容易に受け入れられるものではない。というのも、いかなる人間によっても認識されない事物が存在するということは通常ありうるのであって、そうである以上、あらゆる事物が無条件に人間知性と合致すると言うことは困難であろう。

はじめに、事物と合致をなすところの知性は人間知性だけではないという点を確認しておこう。トマスは『真理論』「第一問」において、事物が関係を取り結ぶことのできる知性は、神の知性と人間の知性、という二者があるという点に注意を促している。神の知性は事物に対して「制作的な」知性であり、この知性は被造物に対して「尺度」の位置に立つ。これに対して人間知性は（人工物でない）自然的事物に対して「思弁的知性」として関わり、この場合「尺度」をなすのはむしろ自然的事物である²²。つまり、自然的事物は二つの異なる知性に対して、一方には従属的に、他方には基準としてふるまうのである。

そしてトマスによれば、自然的事物と二つの知性の間に成り立つ二つの関係は、そのそれぞれにおいて合致がある。「自然的事物はしたがって、二つの知性の間に位置付けられており、そのいずれとの合致に即しても真と言われる」²³。一方で自然的事物は、神の知性に必然的に関係付けられる。それはあらゆる事物がみな神の知性の内なるモデルに拠って存在するからである。これに対して、自然的事物は人間知性と常に合致するわけではないが、それらは全て人間知性と合致する可能性を有する。「あらゆる存在者は神的知性と合致するのであり、人間知性へも合致しゆくことも可能 (potens) なのであって、逆もまた然りである」²⁴。

1.2.2 合致に対する事物の関係

以上をまとめれば、真理としての合致には、事物-人間知性間の合致と、事物-神的知性間の合致の二種が存在するということである。我々は以下で、やや図式的ではあるが、被造物間に成り立つ前者の合致を「水平合致」と、被造物と超越項との間にある後者の合致を「垂直合致」と便宜上呼称する。

それでは、この二種の合致において、何が存在論的真理の本質を構成するのか。マッコールはこの点に関して、シンプルな解を提出した²⁵。事物はそれが必ず有する「同じ一つの形相あるいは形象」によって、一方で神的知性のうちにあるモデルに合致し、他方で人間的知性の把握と合致しうる²⁶。このように、事物に内在する同じ一つの根拠によって成立するところの、必然的合致と「認識可能性」とが、合わせて存在論的真理の内実だと彼は考えた。

この解釈は、水平合致と垂直合致とが、可能的であるか、必然的であるか、という様相において異なりこそすれ、いずれも存在論的真理を構成するものと考えており、両合致の本性上の差異を問題にはしていない。しかしトマスは、この両者に次のような差異を認めている。「真理は本来的かつ一次的には神の知性のうちにあるが、本来的であるが二次的に人間知性のうちにあり、事物のうちには、非本来的かつ二次的にあるのである²⁷」。神の知性において成り立つ真理と、人間知性において成り立つ真理との差異をトマスは、「一次的」「二次的」と形容している。さらにトマスは次のようにも述べている。

事物のうちにより先にあるのは第二の真理概念 [=水平合致] よりもむしろ第一のそれ [=垂直合致] である。なぜなら、神の知性に対する事物の関係のほうが、人間知性のそれに対する関係よりも先だからである²⁸。

二種の合致のうち、垂直合致こそが「より先に (per prius)」事物のうちにある。本論1.1で既に示したように、トマスは「より先」という語を概念上の派生の順序を指すものと定義していた。この一節は、その定義が明示された『真理論』「第二項」主文の内部に位置する。したがってトマスはここで、垂直合致こそがよりいっそう真理と呼ばれうるものだと述べていると考えるのが自然である。

さらにトマスは、二つの合致が本性上の決定的な異なることを認める。

人間知性との比較において事物について言われる真理は、事物においてある意味偶有的である。なぜなら、人間知性が存在せず、また存在し得ないと仮

定しても、依然として事物は自身の本質のうちにとどまることであろうから。だが神的知性との比較においてそれらについて言われる真理は、それらに不可分な仕方ですら。なぜなら神的知性がそれらを存在へともたらずのでなければそれらは存続することができないからである²⁹。

二つの真理（合致）関係の間には、「偶有的」であるのか否かという差異がある。これは単に、合致が可能であるのか、あるいは必然的に合致するのか、といった様相の差異とは全く異なる。トマスは、アウグスティヌスが事物の真理から「我々〔人間〕の知性への関係」を除外したのは、「偶有性によってあるものはどのような定義からも除かれるからである」³⁰と解釈した。したがって水平合致は単に可能的であるだけでなく、事物の本質に内在的でない、外的な規定に過ぎないとトマスは考えているのである³¹。

こうした差異の根拠はどこにあるのか。重要なのは、合致関係は相互的な関係ではない³²という点である。トマスは『真理論』第二十一問第一項主文において、アリストテレス『形而上学』第五卷第十五章の「関係（ $\pi\rho\acute{o}\varsigma\ \tau\iota$ ）」概念を解釈し、「概念上の関係（*relatio rationis*）」という概念を次のように規定している。

哲学者の言に従えば、その関係は概念的なそれにすぎないものとして見出されるが、それは、関係づけの先にあるもの [=a] へと依存しないもの [=b] が [a へと] 関係付けられると言われ、しかし逆は [依存関係が] 成り立つ、ということによる。というのも関係そのものが何らかの依存性であるからである。このことは知識と知識対象に、感覚と感覚対象において明らかである。なぜなら知識は知識対象に依存するが、逆は成り立たないからである³³。

二つの項 a と b があり、b が a へと関係し、b が a に依存しないが逆に a は b に依存するとき、その関係は概念的である。換言すれば、「関係の主体が、それが関係づけられる先のものに実在的には依存しない」ということである³⁴。知識と感覚とは a の、知識対象と感覚対象は b の例である。トマスはこうした関係が、「尺度と尺度に合わせられるもの、あるいは完成者と完成されるもの、といった仕方に関わり合う他のすべてのものにおいても同様である」と述べる³⁵。これは、尺度や完成するものが、それぞれの相手に対して概念的関係を有するということと考えられる。

トマスは真理（=合致）の関係もこうした非相互的な関係であると考えている。

というのも、既に我々が確認したとおり（1.2.1）、トマスは神的知性が事物の、事物が人間知性の、「尺度」であることを強調していたからである。また上で提示した概念的関係についての議論は、そもそも「存在者一般（ens universale）」³⁶と「真」・「善」との関係を明らかにするために語られたものであり、これを通してトマスは、存在者が「真」と言われることの意味は、存在者の「完成者」という側面を言い当てることになると結論づけている。「存在者の概念を知得する知性は存在者によって完成される」³⁷のだが、こうした合致において知性は存在者へと実在的に依存しつつ、存在者の側はその関係とは独立に存立する。こうした一方的関係を、真という超越概念は示しているということである。

1.2.3 原因の秩序の中での存在論的真理

トマスが垂直合致と水平合致との間に認めていた差異の理由はもはや明らかだろう。水平合致において事物は尺度として知性を完成するが、この関係に依存せず、独立に存立しうる。しかし垂直合致にあつて事物は、神の知性によって完成されるものである。したがって、神の知性なくして事物は、「自身の本質のうちにとどまる」ことができない³⁸。したがって事物は、自身の存立の原因である垂直合致に実在的に依存しており、その意味でこの合致は事物に内在的なのである。そしてトマスは水平合致ではなく垂直合致こそが「一次的な」意味で真理だと考えていたのだから、存在論的真理にとって本質的なのは神の知性との関係であると言わねばならない³⁹。

事物はこの垂直合致に拠って存立することにより、人間知性が事物へと合致することを可能にする。知性は本性上この合致に向かって動かされ、合致において自らを完成するが、このように知性を動かす原因は合致という目的＝終極のものにはかならない⁴⁰。その意味で真理は「知性の善」⁴¹であると言われる。そしてこの合致の「結果」として（本論1.1）、認識が成立する。事物の存在論的真理は、神を頂点とする原因の秩序の中で認識が進行していくこうした構造全体の中で存在者が担う実在的なあり方なのである。

2. VE テーゼ

我々が先に挙げたデカルトの VE テーゼは、デカルトの真理概念の根幹を示すものと考えられてきた。たとえば、「神が欺かない」ということの原因をデカルトは「欺きの形相は非存在（non ens）であり、その非存在にこの上ない存在（summmum

ens) は赴き得ない、ということから明晰に論証され」と述べる (428, 11f.)。こうした「存在論的要請 (une exigence ontologique)」こそが「神の誠実」の教説の核心部にあると見られてきたのだが⁴²、これを明示的に言い表したのもとして、この VE テーゼは捉えられてきた。

それではこのテーゼはどのような文脈で、実際は何を言わんとして記されたのか。このテーゼは 1649 年 4 月 23 日クレルスリエにあてたデカルトの返信に現れる。彼はここで『省察』の個々の箇所を取り上げて注釈を与えている。

「この観念はこの上なく真である、と私は言います」云々。真理は存在において、虚偽は非存在においてのみ成り立ちます (La vérité consiste en l'être, et la fausseté au non-être seulement)。それゆえ (en sorte que) 無限の観念は、全存在を包括することで、諸事物においてある真なるものをすべて包括し、自身のうちに何も偽なるものを持ちません。たとえ人が他方で、この無限な存在が実在することが真でないと想定したがるとしても。(V, 356)

2.1 VE テーゼの背景

この注釈が参照させているのは、「第三省察」の後半、結果からの論証によって神が存在することが一度結論され、その論証の成否に関して想定される批判を挙げて処理してゆく議論の箇所である。結果からの証明は次の様に進む。神の観念の対象的実象性 (realitas objectiva) が極めて大きく、私が存在することだけをもってしてはそのような結果を生ぜしめることができない、それゆえ、そうした実象性の原因たりうる巨大な存在者があるはずであり、それが神である、と。VE テーゼが参照させる箇所で問題とされているのは、出発点となる神の観念がそもそもそうした実象性を持つのか、という点である。それらは、熱や冷の観念と同様の「質料的虚偽」の観念であって、原因を必要としないのではないか。

これに対してデカルトは、次のように答えている。

[神の観念は] 最高に明晰判明であって、他のいかなる [観念] よりも多くの対象的実象性 (plus realitatis objectivae) を含むのであるから、それ自らによって [神の観念よりも] より真である (per se magis verus) ものは何もないし、そこにおいて虚偽が見つかる疑惑がより小さい (minor falsitatis suspicio) ものも何もない。この上なく完全で無限な存在者についてのこの観念が、最高に真である (maxime verus) と私はいう。というのも、そのような存在者が

実在しないと思ひ描いてみる事が、もしかするとできるかもしれないとしても、それでもそれ〔存在者〕の觀念が、冷の觀念について私が前に言ったように、実象的なものを何も私に呈示しないということを描くことはできないからである。(傍点引用者)(VII, 46, 8-15)

先の書簡におけるデカルト(あるいはクレルスリエ)の引用は、正確ではないが⁴³、上の箇所の傍点部を指していることは間違いない。

それでは、『省察』のこの一節において、神の觀念が「真である」とはどのような意味だろうか。この点に関して我々は次の二点を指摘することができる。

第一に、神の觀念の真性は、觀念対象が実在するか否かということを全く問題にしない。これは VE テーゼの示される書簡においても同様に強調されている点である。引用した『省察』の一節においてデカルトは、神が実在しないと想定できるかもしれないとしても、依然として、觀念は対象の実象性を持つゆえに、真であると強調している。そもそも『省察』の議論の筋道からして、ここで神の觀念の真性は神の実在とは関わりなく成立しなければならない。なぜなら、結果からの神の存在証明は、神の觀念のあり方から、それを生み出す原因を要請し、原因たる神の実在を導くものである。それゆえ、この觀念のあり方そのものに疑いがかけられているときに、神が実在することを前提して議論するならば、悪しき循環論証が完成してしまうからである。こうして、神の觀念は、そのいわば觀念対象(ideatum)のあり方を全く問題にしない仕方で「真である」と言われているのであり、それが「それ自体で(per se)真」と言われていることの意味である。

第二に、真であることと、実象性を持つこととの間に比例関係が認められる。神の觀念が真であることを論じる議論が全体として、「他の全ての觀念」との比較に基づいた議論であることに注意を払おう。神の觀念は他の全ての觀念「よりも多くの対象の実象性(plus retalitis ojectivae)を含む」、それゆえに(cum)、神の觀念に比べて「より真である(magis verus)」觀念も、虚偽の疑惑が「より小さい(minor)」觀念も、ない。この議論において、觀念の実象性の度合いと、真性の度合いとが比例するという関係が示されている。村上が指摘するように、ここでの「真」は、「いっそう実象的であることがいっそう真であるような「真」なのである」⁴⁴。

2.2 VE テーゼの意味

「第三省察」の以上の分析から我々は、神の觀念が真であることは、1) 神の

実在とは切り離して成り立つこと、2) 真理の度合いが実象性の度合いに比例すること、を示した。これを踏まえれば、VE テーゼの示す内容は次のように解釈することができる。

VE テーゼは「それゆえ」以降に示される次のような帰結をもつ原理として提示されている：無限の観念が全存在を包括することで、他の全てに優って真であり、偽を全く含まない。ところで上で確かめたように、無限の観念はその対象の実象性において他のあらゆる観念を凌駕するのであって、それに比例して、いっそう真であると考えられている。したがって確実に言えるのは、VE テーゼにおける「存在」は、観念の対象の実象性を含むことである。このテーゼは、存在と真理（非存在と虚偽）との間に、「においてのみ成り立つ (*consister en ... seulement*)」という関係が成立することを通して、存在することと真であることとの間に比例関係を成り立たせるが、そのような関係は、観念が精神のうちにある限りで持つ対象の実象性についても例外なく、一般的に成立するのである。

3. トマスの存在論的真理と VE テーゼ

トマスにおける存在論的真理が存在者と合致の関係をなす知性を必ず要請する関係的性格を持つものであったのに対し、デカルトの存在はそうした関係項をもたない。というのも、観念の対象の実象性がここでは一つの「存在」として認められているが、この観念は、1) 既に示したように、精神の外にある実在との関係を問題にせず「真である」と言われうるものであるし⁴⁵、2) 観念は「思惟の様態 (*modus cogitandi*)」に他ならないのだから、思惟する事物である精神と観念との合致を考えることは不可能である。かたやトマスは、合致は同一のものにおいては成り立たず、異なるものどうしの間には成り立たない、という点を強調している⁴⁶。デカルトにおいて観念と精神との間には、こうした差異が成り立たないゆえに、合致を考えることもできない。

とりわけ重要なのはデカルトが、存在論的真理から神への参照を抹消したことである。デカルトもトマスもともに、あらゆる存在が真である、という意味での存在論的真理を認める（この限りでアムランの指摘は正しい）が、神的知性への参照の有無という一点において、両者は決定的に異なる。トマスにおいて存在論的真理の概念はその本質のうちに、神の知性のうちにある尺度による完成関係を構成素として含むものであった。これに対してデカルトは、なるほど、諸観念の対象の実象性の原因が神であることを認めるが、それらの存在論的真理は、さし

あたり神を参照することなく概念として成立する。むしろ観念が実象性を有し、真である、そのことの原因がなければならない、と考える、この点においてこそ、デカルトはトマスと決定的に異なる。デカルトは、少なくとも VE テーゼにおいては、トマスとは全く異なる真理概念を示していたのである。

¹ Gilson[1982], p. 266.

² Gilson[1982], pp. 278–285.

³ なお、今世紀に至ってオリバーヴォが、デカルトにおける真理の概念を主題的に論じた研究を行った。彼の著書『デカルトと真理の本質』(Olivo[2005])は、『規則論』から『第四省察』までデカルトのコーパスを広く探索し、ハイデガー流の「確実性としての真理」という解釈を裏付けようとするものである。デカルトの真理論という主題そのものに関しては是非とも検討すべきものであるが、デカルトのテキストの探索に注力した本作は、トマスの真理概念とデカルトのそれとの本格的な対比に取り組んだものではない。また、ゲナンシアもデカルトの真理概念を主題的に論じている (Guenancia[2000], chap. VIII.) が、中世との比較は行っていない。

⁴ Hamelin[1921], p. 153f.

⁵ Hamelin[1921], p. 154.

⁶ McCall[1938], p. 21.

⁷ V は « vérité », E は « être » の頭文字である。

⁸ それぞれの起源に関して詳しくは、Van de Wiele [1954], pp. 522–542.

⁹ *DV*, q. 1, a. 1, co, l. 176–200.

¹⁰ 詳しくは渡部[1990], pp. 38–48.

¹¹ Van de Wiele[1954], p. 550.

¹² « cognitio est quidam veritatis effectus » (*DV*, q. 1, a. 1, co, l. 175f.)

¹³ « prima ergo comparatio entis ad intellectum est ut ens intellectui concordet, quae quidem concordia adaequatio intellectus et rei dicitur, et in hoc formaliter ratio veri perficitur. » (*DV*, q. 1, a. 1, co, l. 166–170.)

¹⁴ « l'essence même de la vérité » (Floucat[2004], p. 52)

¹⁵ « Res autem non dicitur vera nisi secundum quod est intellectui adaequata, unde per posterius invenitur verum in rebus, per prius autem in intellectu. » (*DV*, q. 1, a. 2, co., l. 49–80.) 強調は引用者による。

¹⁶ 「真はより先には知性の真理について言われ、[...] 事物については、事物が原因であるかぎりにおいて言われる (verum per prius dicitur de veritate intellectus, [...] de re autem dicitur, in quantum est causa)。」(*SS*, dist. 19, q. 5, a. 1, co., p. 486.)

¹⁷ *DV*, q. 1, a. 1, co, l. 95–161.

¹⁸ « convenientiam vero entis ad intellectum exprimit hoc nomen verum » (*DV*, q. 1, a. 1, co., l. 159–161.)

¹⁹ « ens sumitur ab actu essendi sed nomen rei exprimit quidditatem vel essentiam entis » (*DV*, q. 1, a. 1, co., l. 137–139.)

²⁰ Wippel[1990], pp. 550–556.; Aertsen[1996], p. 264.

²¹ « Cum autem in re sit quidditas ejus et suum esse, veritas fundatur in esse rei magis quam in quidditate, sicut et nomen entis ab esse imponitur; et in ipsa operatione intellectus accipientis esse rei sicut est per quamdam similationem ad ipsum, completur relatio adaequationis, in qua consistit ratio veritatis. Unde dico, quod ipsum esse rei est causa veritatis, secundum quod est in cognitione intellectus. » (*SS*, dist. 19, q. 5, a. 1, co., p. 486.)

²² *DV*, q. 1, a. 2, p. 9, l. 81–96.

²³ « Res ergo naturalis, inter duos intellectus constituta, secundum adaequationem ad utrumque vera dicitur » (*DV*, q. 1, a. 2, p. 9, l. 97–99.)

²⁴ « secundum quod dicitur de rebus convertitur cum ente per praedicationem, – omne enim ens est adaequatum intellectui divino et potens adaequare sibi intellectum humanum, et e converso → » (*DV*, q. 1, a. 2, ad. 1.) McCall[1938]は、人間知性との合致の可能性が全ての事物にあるという点を、他にも豊富なテキスト上の根拠によって確立した。

²⁵ McCall[[1938], pp. 22–29.

²⁶ 「事物そのものはその有する形象によって神の知性へと合致する。それはあたかも、作品が技術へ合致するがごとくである。また事物はその形象の力によって、心の内に受容された自らの似姿によって、自らについての認識を生じさせるかぎりにおいて、我々の知性に合致するような本性をもつ」*« Res enim ipsa ex specie quam habet divino intellectui adaequatur sicut artificiatum arti, et ex virtute eiusdem speciei nata est sibi intellectum nostrum adaequare in quantum per similitudinem sui receptam in anima cognitionem de se facit; »* (*DV*, q. 1, a. 5, ad. 2)

²⁷ *« Est ergo veritas in intellectu divino quidem primo et proprie; in intellectu vero humano proprie quidem sed secundario, in rebus autem improprie et secundario »* (*DV*, q. 1, a. 4, co., l. 159–162)

²⁸ *« Prima autem ratio veritatis per prius inest rei quam secunda, quia prius est eius comparatio ad intellectum divinum quam humanum »* (*DV*, q. 1, a. 2, co., l. 113–115)

²⁹ *« Veritas autem quae dicitur de rebus in comparatione ad intellectum humanum, est rebus quodam modo accidentaliter, quia, posito quod intellectus humanus non esset nec esse posset, adhuc res in sua essentia permaneret; sed veritas quae de eis dicitur in comparatione ad intellectum divinum eis inseparabiliter concomitatur, cum nec subsistere possint nisi per intellectum divinum eas in esse producentem. »* (*DV*, q. 1, a. 4, co., l. 171–179)

³⁰ *« Augustinus loquitur de veritate rei; et excludit a ratione huius veritatis, comparationem ad intellectum nostrum. Nam id quod est per accidens, ab unaquaque definitione excluditur. »* (*ST*, q. 16 a. 1, ad. 1.)

³¹ Van de Wiele[1954], p. 551; Wippel[1989], p. 300ff.; Aertsen[1996], 271–274; Floucat[2004], p. 57.

³² Wippel[1989], p. 325; Aertsen[1996], p. 270. がこの点を強調する。

³³ *« Illa autem relatio, secundum Philosophum in V Metaphysicae, invenitur esse rationis tantum secundum quam dicitur referri id quod non dependet ad id ad quod refertur, sed e converso cum ipsa relatio quaedam dependentia sit, sicut patet in scientia et scibili, sensu et sensibili: scientia enim dependet a scibili sed non e converso. »* (*DV*, q. 21, a. 1, co. l. 162–169.)

³⁴ Aertsen[1996], 270.

³⁵ *« Et ita est in omnibus aliis quae se habent ut mensura et mensuratum, vel perfectivum et perfectibile. »* (*DV*, q. 21, a. 1, co. l. 174–176.)

³⁶ *DV*, q. 21, a. 1, co. l. 124f.

³⁷ *« ab ente perficitur intellectus qui percipit rationem entis »* (*DV*, q. 21, a. 1, co. l. 184f.)

³⁸ *DV*, q. 1, a. 4, co., l. 175.

³⁹ 「神のロゴスへの関係が、事物の真理にとって本質的である。」(Aertsen[1996], p. 273.); 「存在の真理が明かすのは、神的知性への合致関係である。」(Floucat[2004], p. 58.)

⁴⁰ 目的としての「真」が知性を動かすという、この、認識を進行させる構造について詳しくは花井[1996], pp. 119–126.を参照。

⁴¹ *DV*, q. 1, a. 8, co., l. 140f.

⁴² Rodis-Lewis[2013], p. 306. グイエは、神の誠実を証明するにあたってこうした要請が「権利においては第一である」と評価している (Gouhier[1999], p. 263.)

⁴³ 書簡においては *« Est, inquam, haec idea summe vera »*、『省察』本文においては *« Est, inquam, haec idea entis summe perfecti & infiniti maxime vera »*。

⁴⁴ 村上[2012], p. 269.

⁴⁵ Guenancia[2000]は正しくも、観念の真理は「まさに精神のうちにあるのであって、純粋な無ではない」(p. 472) ことにおいて成り立ち、その観念が「他のあらゆるものとは切り離して精神によって捉えられる限りで、事物そのものなのである (est la chose même)」(p. 475) と述べる。

⁴⁶ *« idem autem non adaequatur sibi ipsi sed aequalitas diversorum est; unde ibi primo invenitur ratio veritatis in intellectu ubi primo intellectus incipit aliquid proprium habere quod res extra animam non habet, sed aliquid ei correspondens, inter quae adaequatio attendi potest. »* (*DV*, q. 1, a. 3, resp., l. 29–35.)

[凡例]

『真理論』(=*DV*)、『神学大全』(=*ST*)からの引用はレオ版 (*Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia* iussu Leonis XIII P. M. edita, Roma.)から、『命題集註解』(=*SS*)はマンドネ版 (*Sancti Thomae Aquinatis Scriptum Super Libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi Episcopi Parisiensis*, ed. R. P. Mandonnet, Tomus I, Paris, 1929.)から行う。『真理論』の翻訳にあたっては、花井一典訳、『真

理論／ペトルス・ロンバルドゥス命題集註解』, 哲学書房, 1990. を参考にした。デカルトからの引用は AT 版 (*Oeuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Nouvelle presentation, Vrin, 1964–1973) による。そのさい括弧内に巻数と頁数を順に記す。ただし第 VII 卷『省察』からの引用のさいはそれに続けて行数を記す。

[文献表]

- J. A. Aertsen, *Medieval philosophy and the transcendentals : the case of Thomas Aquinas*, Brill, 1996.
 E. Gilson, *La Liberté chez Descartes et la Théologie*, Alcan, 1913 / Vrin, 1982.
 H. Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin, 4^e éd., 1999.
 P. Guenancia, *Lire Descartes*, Éditions Gallimard, 2000.
 O. Hamelin, *Le système de Descartes*, Félix Alcan, 2^e éd., 1921.
 R. J. McCall, “St. Thomas on Ontological Truth”, *The New Scholasticism*, 12 (1), 1938, pp. 9–29.
 G. Olivo, *Descartes et l’essence de la vérité*, PUF, 2005.
 G. Rodis-Lewis, *L’œuvre de Descartes*, Vrin, 1971, 2013.
 J. Van de Wiele, « Le problème de la vérité ontologique dans la philosophie de saint Thomas », *Revue Philosophique de Louvain*, 3^e série, 52 (36), 1954, pp. 521–571.
 J. F. Wippel, “Truth in Thomas Aquinas”, *Review of Metaphysics*, 43 (2), 1989, pp. 295–326.
 J. F. Wippel, “Truth in Thomas Aquinas Part II”, *Review of Metaphysics*, 43 (3), 1990, pp. 543–567.
 Y. Floucat, « La vérité comme conformité selon saint Thomas d’Aquin », *La Revue Thomiste*, 104, 2004, pp. 49–102.
 村上勝三, 『デカルト形而上学の成立』, 講談社学術文庫, 2012.
 花井一典, 「真理と善の間に—超越概念から見た聖トマス認識理論—」, 『哲學雑誌』113(785), 1998, pp.113–128.
 渡部菊郎, 『トマス・アキナスにおける真理論』, 創文社, 1997.